

G-92

1353

135
1666

基督之復活

公教宣教師ラゲ著

歴史乃論點に據りて証す

於日本南部教化父代理
司教 儒利譽准

基督の復活

基督の復活は、其の主耶穌基督を以て、眞誠の神ありと、降誕前數百年

の証左に因るとあるが、別けく基督は降誕前數百年

の証左に因るとあるが、別けく基督は降誕前數百年

の証左に因るとあるが、別けく基督は降誕前數百年

の証左に因るとあるが、別けく基督は降誕前數百年

の証左に因るとあるが、別けく基督は降誕前數百年

特49 No 6265/23
011.5
CHIO



基督の復活に給ひ去るの偽りなきや是は歴史上の最も
確實ある所に去て、毫も疑わべからざる事實なり、
今我儕の証すべきものと僅り二點を過死するあり、

一 基督の實に死に給ひ去る事

二 基督の死に給ひて後、實に活きて顔面を給ひ去る事

○ 第一點ある、基督の死に給ひ去るとは、左の數條に由りて
証せらる

一 基督の死去に付ては十字架の下にお立ちたりと証人ヨハネ
の明言と他は福音子との傳と一定也

二 實に基督の死せらるべし譯なるは、打擲呵責は言ふべし
もあらず、死は上殘刻の扱ひに、両手兩足各々に釘付せら
るに給ひ去に、其十字架に三時が程も、御息の存らざらる

るど甚も不思議の事ありと云、尙猶太國は歴史家あるヨセフ
の言葉を考ふるも、十字架に釘付られ去のそおても、必ず
死にべし答ありとあり

三 基督を逮み死に給ひ去るが爲に、逮たさるる兵卒等と、竟
に耶穌の腰も推かさりけり、是を其既に死せらる去と認
死に給ひ去るあり

四 兵と腰を推しぬ代りに、鐵もく基督の脇腹を刺通さける
に、血と水は流さるに、此色のそおても、其死せらる、お餘
る程あり

五 羅馬帝の代理ピラトなる者、基督の死體を、十字架より取
下し、これを許可するも、唯其御生息は疾くおも絶えざる
あとを、百夫長よと聞認去故あり

六 ニコデモと呼べる者

六

携へ來り、猶太の埋葬の例に循つて、基督の死骸の爪端より頭上迄、泉布と香にて緊く包裏せり、如何に健全の人であるも、一日二夜が間斯く包裏せしむるべからず、生息は絶えざるべし

七 究竟猶太人と、基督の死去に

七

認得せるべし、然らざるべし、決て一の検査だもせず、況んや兵と墓所に遷るべし、非ざるも、猶太人の死せらるる、なるべし、猶太人と、必ず之を殺せしむるべし、厭はざるべし、然る、其死去の微塵程も疑ひ無ければ、猶太の官吏も教師も、他教の論者も、更に反對説を立たざるべし、故に基督の死骸と、其弟子等、盗まざるべし、証法者も有りたり

○ 基督の死骸自ら癒えて、其目開たれば、抑て云る者、嘗て一人も癒ることなし、由是觀之、基督の死去、誠無疑を容るべからざる事實あり

○ 第二點、ある基督の復活を給ひ、之と、果ては信實の事あるべし、先づ基督は死去も、其復活も、共に千八百年前の事あるべし、是を固より記録即歴史上の事あり、抑て歴史あるもの、之を心學に於て、到底夫れ物體學の如く、實驗即事實を以て、一々其事を眼前に証することを得ざるなり、其故、或るや、元來事實に於て、確實あるべし、非ざるも、只記録の性質とて、其事故の止むを得ず、疾くも過去に屬せざる、固より、嘗て基督の復活を、親く實驗せざるべし、吾人等は、幾と千八百年前の社會に出で、猶

六 ニコデモと呼べる者

六

携たづ來きたリ、猶なほ太たの理ま葬さうの例れいハ循したがつて、基督きりすとの死し骸がいの爪つま端はよ
リ頭かぶ上うへ迄まで、泉いづ布ぬと香かにて緊きく包つつ裏うら先まへと、如何いかに健けん全ぜんの入いる
るも、一日いちにち二夜にふたよが間あひだ斯かく包つつ裏うらまきあは、以もつりてり生い息いきハ絶た
えざるからむ

七 究竟猶太人と基督の死去

に際ついでく、少すこりも疑うたがへずまて慥たしか
認にん得とくざるおほらざるべし、決けつまて、一いつの檢けん査さだもせず沈しりお
兵へいと墓はふ所しょに遺おくるべし、非あらざるも、猶なほも基督きりすとの死しせらる、
なありせば、猶なほ太た人と、必かならず之これを執とらふとを厭いととざるまて
らん、其その死し去きの微つひ塵じん程ほども疑うたがひ無なけは、猶なほ太たの官くわん吏りも
教師きうしも、他た教けうの論ろん者しやも、更さらに反はん對たい説せつを立たてざるまて、然しかも基
督きとくの死し骸がいと、其その弟てい子し等らも盜とまきと、証しやう者しやも有ありま

と、基督きりすとの疵きず自ら癒いえて、其その目め開ひらけたと云いふ者しや、嘗かつて一
人も癒いることなるまて、由よし是これ鏡かがみ之これ基督きりすとの死し去きハ、誠まことに疑うたがを
容ゆるべからざる事實じじつあり

○第二點だいにんてんある基督きりすとの復活かふくわつを給たまひまことと、果はたまて信しん實じつの事こと
あるは、先まづ基督きりすとの死し去きも、其その復活かふくわつも共ともにお千せん八はち百ひゃく年ねん前ぜんの事こと
あるは、是こを固まよと記録きらく即すなはち歴史れきし上の事ことあり、抑おさへ、歴れき史しある
るもの、心こころ性せい學がくハ一いつにまて、到底とうてい夫かれ物もの體たい學がくの如ごとく、實じつ驗げん即
踐た實じつを以もつて、一いつ々ごと其その事實じじつを眼め前まへに、証しやうすることを得えざるまて
其その故ゆゑあるや、元もと來きた事實じじつお於ある、確たし實じつあるざるおと非あらざるまて
只ただ記録きらくの性せい質しつとまて、其その事こと故ゆゑの止とどむを得えず、疾はやくおも過あ去かお
屬ませまお因よ色しきと、嘗かつて思おもへ、基督きりすとの復活かふくわつを、親したく實じつ驗げんせま
欲ほつするときハ、吾われ人ひと等らは、遠とほざりて千せん八はち百ひゃく年ねん前ぜんの社しゃ會かいお出いで、猶なほ

大人と諸共に、基督の復活を懐く耶、然らずんば今日基督を呼出せ、眼前復活せしむる耶、其他に於て、更なる方法なかる可也、然るに此等の方法の固より為を得べし事には、らざるも、三尺の童子も知るあり、是乎、歴史の批評、即評論てふもの、何れも、此に由りて、事實の眞偽を正さざるべし、らす、蓋し其評論たる、二照に極き事、一と事故を傳へたるものと、相違ありや、眞偽を正さざる耶、二、檢て明たなるものとを、現實に傳へたる耶、是れあり、要するに証人即歴史家と欺かざるに非ず、欺くにも非ずとさる、決定せば、之を信用せべし、外なきなり、故に吾人等は、其評論を従つて、みよ、基督の復活の証人と果てしなく信用せべし、者ありや、否やと、驚くと相正せべし、事ありけし

○先づ基督の復活の証人と、欺かれたる耶。決て欺かば、たゞとは言ふべからず、蓋し基督の現はる給へると、若し、少頃のよと、おきて、一回か、二回か、一人り、二人の前の事なりせば、之を見たりと、意へるものと、或は妄執あるべし、と言ふべし、此を固より、斯るものと、非ざるあり、此之を証する者、曾て基督を知らざる者、或は傳聞せし者に非ず、其首なる者、則ち十二人の使徒と、基督の親く撰と給ひ、兄弟ありけし、即ち三年間常に基督に隨從し、基督の十字架上に死せらるも、又其復活らるも、共に明確に認め、著なり、而も、彼等其復活られしを認め、夜間に非ず、夢中に非ず、眼も能く明る、死白晝にて、且や、本心も全く備へ、正しく基督を目撃し、其聖語を聞け、其聖命を聞け、手もく其聖

軀を試み換と、尚疵口迄も探り去上に復た食事等をも備に
去く、種々の証左を取るるものとあり、故に是に就て彼
云へるよしとあり、「吾儕が聞け、又眼みく見、懇ろに見、我手押
去所の者、即ち太初より在り、去生命は言詞(基督)を汝等が傳
ふ、此生命現はせられたれば、吾儕之を見、証明を爲す、吾儕見去所
聞き去所を、汝等に傳ふるは、汝等を去く吾儕と供あらずめ
むが爲かざり」と(約翰第一書第一章)
叔基督の現はせ給ひ去よとは、僅り一兩回お止まらず、四十
日間幾回とある、異なる所、異なる場合、即ち墓所の近傍、エ
ソマウス邑に向ふ道に、晚餐の室内に、海邊に、振籠山等の諸
所お現はせ給ひたり
之を見、去者夥と去く、善婦人も之を認め、使徒彼得も之を認め

エソマウスへ行く弟子等も之を認め、復た使徒が十人集會
去、或は十一人集會せしとき、幾回も現はせ給ひ、海邊あては
七人の前お現はせ給ひ、又五百餘人も現はせ給ひ入り
此等の事を讀む者、或は疑念を生ずるとあるらん、即ち使徒等
おし、くは、正しく基督を目撃せしとは、意ふべきこと、必竟無
學の者共あはば、深くも探究あるくして、輕く去く信せ去
おと非るや」と。然るに如何に基督の弟子は無學あり、去も、基
督の復活は、借お遣かお信せ去に非ず、奇ある疑念も生じ
去り、况や復活を檢するには、然る迄學力の必要を見ず、誠の
証憑こそ必要あり
初め弟子等と、基督の復活を給ひ去ことを、天使お知らせさ
る善婦人共の告來去時、「這と痴談あり」とく之を肯けず、又

十二
基督を見たるマダレナと云るもの、告げ去も信せず、又
二人の弟子が途中及び宿宅等お於て、實お明かに基督を見
且其聖話を聞かんと具さふ來り語げ去かを集ひ居たる十
人の弟子は、之を信せざりて、時お基督忽然其中に立ち給ひ
く、「爾曹安らむ」と宣ひ去に、彼等と駭け懼れつ、「這は豎なら
ん」と思ひける、基督重ねて宣ひけるは、「爾曹何ぞ駭くや、何
ぞ心お疑ひ起るや、我手我足を見く我あるを知、我を摸で
、視よ、豎と我比有るを爾曹が見る如く、肉と骨とを有さる
なむ」と、而去く其手足を示し給ふに、彼等喜べども猶信せず
窃お異を把けるに、基督此處に食物在りやと宣へば、炙り
たる魚と、蜜房とを出すおぞ、基督と其前お於て食せらる、彼
等と此等の事よと去く、初先く納得去れと去り、此時トマ

スと云へる弟子と、偶他出の中なとけ色バ、朋より右等の
去を聞かんと、容易く信用するおと能はず、斷然彼等お答へ
く曰けると、我を若去其手お釘の痕を視、或指を釘の痕お探
去、或手を其脇に探すお極らずんば、到底信するおとなりる
べ去、「と抑く次回の日曜日には、トマスも右等の朋と全じと
一處お集ひ居りて去が、基督復此處お臨み給ひ、「爾曹安らむ」と
と宣ひく、遂おトマスお仰せけると、「爾の指を此に伸べく我
手を見、爾の手を伸べく、我背に探せ、信せざる勿き、信せよ」と
トマス應へく基督に對ひ、「我が主、我が神よ」と云ひけるお、基
督彼を宣ひけるは、「爾我を見去、小由りく信せと見ず去く
信せ去者も福あり」と
夫れ弟子等と、四十日の間斯る實驗お因りて疑念を釋ら去

基督の賢に復活らば法を明認たれば然るは彼等が妄執とは
決まて言ふを得ざるあり、基督おと、三歳が問も親く候て、其
顔と云ひ、形と云ひ、聲と云ひ、話と云ひ、能く其状態を知悉せ
るお、猶他物若くは幽霊の類を、眞の耶穌と誤りて、其欺死を
喰ひたるならん、と謂ふべからず、或は一人、或は二人、
人、或は十人、五百人も、四十日の間見ざる所を見しと意ひ
聞ひざる所を聞けり、と意ひ、觸る所を手にて觸れたりと
意ひまや、四十日間一様お執りも變らぬ迷ひを惹起し、執りも
變らぬ思念を生じ、執りも變らぬ現象お感て、空て迷ひと
いふふとを、争で一人も解死得ざりまや、斯くの如きふと
まて、猶も之を証憑ととるお足らずとせば、吾曹の五官の報
とる所、眞とお何の益り有らん、社會の秩序の據る本づく所

の証據の法、信用の義務と、果ては何等の用をり爲すや、基督
の弟子と、決まて輕忽の思ひを爲さず、又實驗を経ずまて、其
復活を信せまお非ざるあり、若も彼等に於て、答むべからず
何とせば、彼等の信するふとの早死お過ぎたる所お非ず
反て、彼等の疑團を把きま所にぞ有る、然るに其疑團たる、誠
に我曹に取まての幸あり、蓋て彼等に於て、代々の信者の
心頭に、少りも疑を與へぬ様、圖らず知らず、天意に隨ひ、顔
里に疑團を凝まも、終に確實の証據を認めて、釋然お解また
る者あり、故て決まて欺るまてと謂ふ可からず
○ 叔復彼等おまて、欺く世人と欺るまると、言てむも愚の
覺ゆるが、先づ人を欺くおと、其欺死得べからず、着眼なるもの、及
び其欺死お由まて得べからず、利益の目的なりるべからず

基督の弟子等に、何の目的に在る有らば、能くも欺らんとして
爲されざるや、既に彼等の頼るところに、師は誤りしに、甚だ之
世の救主とも爲されたる者が、罪人の如くお救されしに、復活
らん」と宣言せしむるは、若し復活らる、何らすれば偽り人
の名稱は、到底適る、能はざるべし、彼等「我々の大欺り
た」と言ふは、到底適る、能はざるべし、其偽り人を奉ぐ、神全
くお尊崇はせ、亦復活らざるを故らに、復活せよと吹聴せよ
スラヘル人おも、サマリヤ人おも、地の極邊おも至る迄、信徒
せよ、然しひとり爲せ得るぞ、斯る不届至極の企を、彼れ弟子等
おまゝ爲すべきのや、儼も斯る企を爲せ、とせば、彼等と共に
に謀りて言ふらん、基督は卒に吾儕を欺死た、三日目お
復活らんと約せたるも、未だ死する儘なまじ、吾儕

之真理に對し、宗教に對し、且つ各自の利益に對し、明らお其
事を言とざるを得ず、然れども、寧ろ彼れの譽色の爲、我が本
心、我が名望、我が身体、我が生命迄を付さん、彼色の死骸と
今猶ほ所お在るものと、知せよ、誠に復活せよと流布せんが
爲、來、竊に之を奪えん、而も去る全世界の人を去る、唯一の神
と尊崇はせ、然れん、諸國の教師や、國民の怒り、少く顧ること
お、此の詐謀を達せん爲に、如何ある事をも、凌ぐべし、神
の偽りを惡み、給ひて天罰を降さる、もあらんが、猶之をも避
けざるべし、或て現世お於て益を見ず、反く師の轍を踏んで
死するも、何るべく、或は來世の罰をも、逆を得まじ、死が來、天
地お畏色す、願むべし」と、然るお僅り十二人の使徒の中、そら
既におエダの若死謀叛人、何り去ら、當時五百有餘の人々が、一

入りも資を減らさるゝとなく、其殺さるゝに至る迄、皆全心協力と
と、終に詐謀を達せんと曰ふべし歟
夫は斯の如く企は、復今如何なる象徴あるも、中々計較と辯
死所に去く、到底遂ぐべしこと、へふべしらさば、況んや基
督の弟子等が得て能くべき所、非ず基督の使徒即ち弟子
の中の優る者は、凡そ微々する漁夫の徒に去く、其學力は
言ふ迄もなく、辨も、資力も、少く有する所なく、尤も、弱き者
共あり、其首徒たる者も、下婢や下僕に畏れ、吾と基督を知ら
ず」と誓ひ、三度も斷言する程あり、而去く、只一人を除くの外
と、總て、基督の臨終の苦難も餘所不見く、何處とも無く、逃匿
を、其復活の時も、皆猶太人、小恐色、門戸を鎖て居る臆病
未練の弟子のとも、斯くの若死者に去く、爰何ぞ全世界の

人々、小己が詐術を試むるを得んや、然るに之色が實際を考
察せよ、既に述べたる如く、基督を四日間弟子等に現とせ
十分の証憑を立ち、益々教理を講せらるゝ、遂に昇天遊びさる
を、時、小弟子等、小宣とく、「聖靈汝等、に臨む、因て、後、汝等
権能を受け、エルサレム、猶太全國、撒馬利亞、及び地の極邊に
至る迄、吾が証明人と爲るべし」と、果て、其十日、目、小聖約の
若く、彼等と、聖靈を以て神の勇力を蒙り、けさば、遂に下婢や
下僕、小對とく、可憐にも、基督を棄てたるベト、口と、翻然、義氣
を奮興と、公け、小基督の復活を告げ、基督を殺せ、去者、其前に
も、少く、屈せず、其實を著と、去、憚らず、衆人に向、ぬく、曰ける、と
「汝等、生命、主を殺せり、神、之を復活らせ、給へ、里、吾、爾、之
色が、証明、人あり」と、遂に、小獄舎、小繋がる、も、又有、司、其、前、

も長老の前も學者の前にも祭司長の前にも更に臆する
 所も、殿司下吏等に捕りて、議員の前も立ちたる時、祭司
 長問曰て曰ける、「我儕基督の名も託りて教ゆる勿きと、汝
 曹も嚴く禁せしお非ずや、然るに汝曹其教をエルサレムに
 滿ち、亦お人の血を我儕に負たまゆめんとす」と、ペトロと使
 徒等答へて曰ける、「人に從ふよりも尙神に從ふべし、
 神は爾等が木も砕けり殺せし所の耶穌を甦らせ、之を君と
 爲し、救主と爲て、其右に方に擧げ給へり、我儕と此事の証明を
 爲す者あり、神の已に從ふ者も賜給所の聖靈も、亦証明を給
 ぬ」と、何程懲戒せらるも、「吾儕見し所聞し所は道とざる
 を得ず」と、而去り、卒に鞭撻る、お至り、去り、使徒等は、耶穌の
 名に爲し、若辱を受くるお足る者とせらば、去りてを喜び、

議員の前を去り、日々會殿及び人家に於て教を爲し、耶穌基
 督の福音を傳へて止たざり、此に由りて之を説れば、基督
 の弟子は、詐術を以て人を欺かん、と爲さるるお非ず、唯誠實
 にて、其明認たる事實を徹せしのみ、其述る所と決まて隠
 然たる事實に非ず、固より當時に於て尤も顯然たる所、お去
 り、且つ甚だ重大の事あり、或は之を賛する者も、何れと雖
 も、又推門に人にしと痛くも之を拒絶する者も、何れと雖
 し、福音書を公平の眼を以て熟讀せば、誰かは感ずる莫るべ
 き、即ち使徒等が、己の信仰を曰ふも、過誤と曰ふも、勇氣を曰
 ぬも、臆病を曰ぬも、基督の永福を曰ぬも、呵責侮辱を曰ふも、
 其復活を曰ぬも、困難を曰ぬも、皆純粋おし、一様の譚なり、
 然るに極先く臆病の徒あり、去りて、敢て必死の勇氣を奮ひ

基督の復活を、萬國に通告せんと、終身布教を從事し、
 卒には其教を証せん爲自己の生命迄を棄てると、是れ決
 しく他の故を非ず、全う彼の復活の眞實あるに感じよば
 あり、基督の未だ此世に在せし時は、其聖教を信せし者、猶僅
 なりしが、後に使徒等の言に由りて、或は一時に三千人、或は
 一時に五千人と、俄に無数の信徒の増殖あり、正しく使
 徒等の欺のざるに証左ならずや、蓋し當時の信徒等は基督
 を惡くせざる者の中あり、其心も、偏りて之を信仰せ、其心
 を漸く其舊慣を振去り、基督の爲には其生命迄を解さんとせよと、豈
 輕く去り、擧げ出づべけんや、是を其信仰の基礎たる、所謂基
 督の復活に、十分証憑を取り、其信を失はずんば、決て然る
 とあるべからざるは、論を誤す、而して、明瞭あり、而して、當時の

信徒等と、誠し、今日に我儕と異り、當時に在り、其事實の眞偽
 と、之を審み、尤も易く、尤も緊要のみとなし、けし、其之
 を信せ、上は、必ず使徒等の世を欺かざるの証人なりと謂
 とざるべからず、其れ然し、然し、ば使徒等も、其時、の欺、
 の信徒等に、まじり、等しく、生命を顧みず、基督に、聖教を、
 んじ、死地を犯せ、其れ、皆、以、て、世を欺り、ざるの、最も、
 ある証憑といふべし、夫れ、斯くの、若し、証人、其人等、も、
 世人を欺く者と謂ふべけん乎、

○以上、己に、迷ふ、如く、歴史の、評論の、極まる、二點、を、
 説、死、せ、し、取、り、基督の、復活の、証人、と、決、て、欺、
 れ、た、る、に、も、非、ず、欺、死、せ、し、に、も、非、ざる、よ、と、明、か、し、
 故、に、讀、者、諸、君、に、於、て、も、基督の、復活、と、少、く、疑、團、を、
 容、る、べ、し、と、誠、に、信、す、べ、し、事

實に非ずや、故て神が基督の復活を以て信徒の信仰の基礎
 と爲す給ふるには、之を信仰に縁て諦得先給ふの事から
 ず、歴史上お於ても、極先く明りお、極めく動そべからざる事
 實かまると知ら先ん爲先、特別の聖計もく、之を信用せざる
 べららざるの所由を添え給ふ里、蓋と假令世人お於て、使徒
 等が欺きを謀り先ん然と意取おせよ、決まて欺死得べか
 らざるやう基督の復活を否む敵等の所業を以て反く確實
 れ始末と爲先給へり故に、茲お一步を進先く復活の確實を
 るふとを固めんお、縱今基督の弟子と、其復活に就た世人を
 欺りんと爲先たるにせよ、該企は到底成さ得ざりまとい、
 ふとを説かん、
 前も述べたる若く、基督を殺せ先者は、正お猶太國に長そ

る者あり、抑て羅馬國帝の代理ピラトと、基督の聖生息の絶
 えたる後、篤と検査を遂げ、其死骸を十字架より、取下り
 を許可しければ、基督の弟子の中より、没樂と蓋棺を携來り
 死骸に塗里之を近傍れ岩盤に置に取収先、大石を以て、其
 口を塞ぎたり、
 不思議にも、基督の弟子等は、其復活れ聖約を、失念先るに
 似たり先が、其仇等は、反して之を記臆せり、故お耶穌の死去
 の翌日即ち土曜日お當り祭司長とパリサイ人等は、ピラ
 トに往死、或傍彼の偽り者存命れ時、吾れ三日の後に、
 と云ひ先を思出せり、然色ば、恐くば彼の弟子等と、其死骸を
 盗取り、復活先と傳唱んも、知色先斯くて、後日の惑と反
 りて、前日より彌増そべ先、懸お三日お、兵卒を去く、墓

所を守らせ給ふと云ひ去に、ピラト之に答へて曰ける、「爾曹に守る者何れ、隨意に之を守らざりや」と、於是彼等往きて、
 寶口の石に封印を爲し、守者を附せ、取去りぬ、抑て日曜の黎
 明頃、大地大にひか震動せ、寶の中より基督候ち復活せ給ふ
 是時、天使の降來し、塞げる大石を取除き、此に座せ、現は
 色ける、其容貌と閃電の如く、其衣服と雪の如く白し、守者等
 は彼を懼れ、死にたる者のごとくありぬ、然る時、善女人等、
 を見ると來り、去に、天使と基督の變を告げ、色は婦懼か
 がらも甚く喜び、急ぎをさし、其弟子を告んと、走り往り、婦
 の去れ、守者等れうち或者とも、城に至り、凡く有る事を
 祭司の長等へ告ぐれば、彼等長老共と評議を遂げ、獨金を兵
 卒へ與へ、曰ひける、「汝等類く斯くいぬべし、基督の死に

と、吾等が睡眠を伺ひ、弟子等が盜み去りしと、若し此事
 小恙く、首長へ聞ゆることあらば、汝等少く尤も死やう、吾
 曹が此度介保をばせ」と、然るに守者等、獨金を受けたるを
 喜び、獨言らば、若く流言せし、基督の直弟子ある馬太と
 以て、斯る人、斯る語の今日迄猶太人の中へ傳播せし」と、福
 音傳へ記載せし、此れ由りて、觀るに、基督の死に、既に三
 日、目此黎明には、墓所へ在らざりしと、無論なり、其無け
 ばこそ、盜まされしと、流言もせむべき、基督は復活を否
 たる者、其死骸と盜まされしと、以ての外、他へいふべし、方
 べもあらざるが、猶盜まされしと、以ての信實なら、死と
 云ふべし、死の先、基督の弟子等と、復しにだも盜まんとせ
 るとなく、復令盜まんとせし、亦もせよ、遠く必ず遂げ得ざり

去るも、尙も盗みを取らざるとするも、其復活り給ひたまふとを、
 世人に信せしむる先んよと、到底及ぶべき所非ず、今此等の事
 を論辨せん
 第一基督の弟子等の死骸を盗まんと欲するに非ざるを、明
 白に、蓋之前にも陳べたる若く彼等と極先く臆病の者あ
 れば、守者おも懼を懐かず、敢て政府の封印を破り、基督の
 死骸を取らば、亦賢く取るべし、理由も有らざるなれば、論
 者よ、論者之彼等が其師の復活を堅く信ぜたりとす、若
 耶、將た信するなかりと、是を耶、抑疑ひしと、是を耶、若
 去信ししと、是と言ひ、決て去りて、盗む理由なれば、若く信
 る無り、是と言ひ、正しく基督の死骸を喰ひたるらば、其
 取を喰らひ、何、奚何おとす之れが爲らば、盡力せんとの志

何れも、去るも、尙も復活日お當り未だ基督の魂へを明らたさ
 るらち、エノマウスに行く弟子の失望の状を、彼等と途上に
 於て如何が云ひ去り、基督と神も萬民の前に於て、行と言ひ
 大なる権能ある預言者ありと、是が祭司の長と有司等、彼を死
 罪にお付して、十字架にお釘し、我儕イスラエルを贖とん者
 此人など望みたりと、既に此等の事の成り去り、今日
 と三日目あり、我儕の中なる或婦、己儕を驚駭せし、彼等
 朝とやく墓に往、その屍を見ず、去りて、天使の來り、色く被
 は、庭を、去りて、見るを見たりと、告ぐ、去りて、我儕と借る
 往するに、婦の言る如く、且り、色を見たりと、悔つ、途を
 歩行し、去りて、おらざるや、兎も角、其志、去りて、誣ひく、猶只
 獄中にお居り、去りて、以、且り、三日あり、去りて、猶只

怒と云く三日をも經ず苟も之を盗まんを甚だ劣策
 に何らざるや、於是決て死骸と盗まんを以て理由な
 かり
 第二、彼今彼等盗みを企はるも、必ず遂ぐべしとに非ざる
 と、強奪も為らざると能はず、賄賂を以て盗むも得ず、守者の眼
 も到底忍ぶふと能はず、何故強奪を為すやと能
 ざるといて、是を既し陳べざる若く墓所を固し岩磐おく
 其口は、大石を以て之を塞ぎ、封印も何れ守り、然れ
 ば封印をも憚ららず、守者をも恐るす、其死骸を奪はん
 よしと、雄雄と人より遂げ難きは、唯々し死弟子の鄙怯
 心、能く遂げ得べし、よしとあらず、此等の事と、止たに為さんと
 せよのよし、政府は之を知らざるよしとあらず、亦不問お置

くふとあるべしや
 又何故に賄賂を以て盗むも得ずと言て、弟子等は財金も
 有せず、名望も有せず、且つ國の上長に之憎惡れ居るは、守者
 等は斯る者共は賄賂を願ふよし、更に政府の罰を畏る、當
 然かり若し之をしり畏れず、竟に賄賂に迷着し、少時其
 請を請せ、去迎も、或は守者の中に、弟子れ中か、或は彼等の朋
 輩の中か、早晩か其事を漏せる者のあるべし、當然かり、然る
 に今日に至る迄、猶其沙汰を聞く者か、國の上長が枉げ、
 偽りを捕らぬ為に、獨金を守る者か、與らざる疾にも世上に
 沙汰を誰人か守者が、弟子の賄賂を受け、之を聞かざるや
 又何故守者の眼を忍ぶ能ざるといは、墓所の中か、何
 處よりし、入込むべしや、墓所は岩磐れ中か、表の
 一

の竇口の外に他に入らざれば口も亦去らば若し盗に
 警らんとするも其音必ず聞ゆべし其跡必ず知らるべし到
 底問道の得べからずんば必ず表竇口より入らざるべから
 ず表竇口には守者あり如何か去る其眼を忍んで入らざら
 ばや「守者は皆睡眠をせし」とも曰ひ難けり或は交替去るは睡
 眠に就くべし死みともあるべし何ぞ一同睡眠するもとや
 あるべけん然るに縦今一同睡眠するとするも弟子等が其枕
 頭を踏破し封印を破り大石を外に竇中へ入込し後お人
 の見去り死骸を包裏去る其泉布を解死く傍に置て置死
 其死骸と熟と盗み去らんとするも少くも音も噪がせず一
 人の眼だも覺さぬ様能く如何に去る為を得去る若し其眼
 を覺せ去る者の有けんとせば速くも其侶を喚叫死其死骸も

盗人も共にお押さへ死當然あり去若し全守者が眼を覺さず
 了に之をば盗らば去と言へば誰人之を認れ去や之を証し
 る者は守者あるの蓋去熟睡の人を証人と去之を信用せん
 ばとて我が人間社會には如何とせん無数に信者が死を以
 て証せ去るを我等が信するは至當とせざるや然るも猶
 も此の若し去らば其弟子等の盗みの尤守者等の不注意
 の罰は共如何か去る適色しや之を考ふれば、いり兵者
 此類と雖も、尚も祭司等の賄賂を得ずんば徒らお斯る恥辱
 を其身にお暴らば「我々が熟睡中にお弟子が死骸を盗れし」杯
 と、宛然愚管愚管然証據を立去又考ぬるも若しヒラトお
 去て猶太人の願の儘に外國の兵を募所に遣り去らば其
 兵と我は不注意あるべしとて謂ぬらざらざるも猶太人

何らずんば、中々從ひ難死るとあるべし、況や彼の十字架の
緊り、去基督を其主神とそるのみならず、之に對し、其身を
備先、之に對し、其心を正し、其生命迄も抛つ程、其志を起
さんとは、尤も容易の事に非ざるべし、然るを、其志を人々
貫き、人々を改宗せしむるに、一國、二國、一代、二代の限りを
爲さず、亦文明未開の如何を問はず、萬國萬代の人を去く、孰
れも一定せしめむと念ぬとは、豈不届なる企、非ずや、斯
る企を遂げんものと學力に、金太、又百般の方便、各之を持
來り、全世界の學者等雲霞の如く集るも、猶及ばず」とや言ひ
けんもの、に蜀ぞや、幾爾さる漁夫の徒が、僅り十二人の計較
にて、世界の狀態を變へんとするは、餘り痴々然計画あらす
や、併ながら、遠と何程、痴々然も見ゆべし、と基督の十二

人の弟子等と幾分か、其事を達せざること、更、議論を要せ
ざるあり、孔子の弟子三千人もあり、其中尤も秀で去者、七
七十餘人もあり、其教の弘まらば、僅り二三國に止
まるべし、今日に至りても、全世界の卓立たる國の上流の人、四
億有餘の基督の復活を信するあり、此を全く上天の力、自由
に、其復活の事實、其誠なるに由らば、決て得べし、則ち
とあらず、若し基督の復活を真誠の奇蹟と曰とすんば、則ち
其復活らば、去く教は、斯くも蔓延せしむる妙處あり、けし
世界に於て、基督の復活を信せざる者、何程多数を占ると
雖も、之を以て、決て其復活を信用するに足らずと、いぬ
れ、証據とするを得ざるあり、是れ蓋し世界に於て、惡人の善
人より、衆多あるに由り、善と守るに足らず」といぬと、一

色ばあり
 又基督が少數の人を現とせられ去のこめて、猶十分あら
 すと謂ゆるべからず、其故は人数に泥みて論ずるとは到底
 際限あるべからず、假に萬國萬代に一回づ、現とれ給ぬと
 するも、猶満足と言はざるべしなり、固し真誠の証人
 あり、緊要あり、茲に信用すべし証人あらば、断然信用すべし
 外ありなし
 蓋し基督の復活とせば、尤も正確なる事實何國に在りや
 日本、支那、及び歐米各國の歴史を寫し、評論し、照し、見るも、斯
 る正確なる事實何國に在りや、他の宗教の基く所は事實不
 於く、基督の復活の如く、正確なるものは何國に在りや、又他
 教ありて、之を確し、先ん為先、其性命を抛ち去者、幾許ありや

若し此を有とせば、基督の使徒は如く自ら目撃せし所を
 証せんが為なり、或は妄想に取まされ、或は虚説に迷と
 させたる者ならずや、歴史上の事實なり、他は宗教は事實な
 り、之を基督の復活の如く、歴史の評論し、照し、去く論せし、誠
 信するに足らずと認むべし、其幾多なりや、を知り、難か
 るべし、況や基督は復活と、唯、單、孤、成、立、去、他、は、前、後、亦、事
 實の如き者に非ず、去く、最も奇なる前後の事實、密着した
 るに於て、之をや、即ち基督の數百年前より、冀望せられし所
 者なり、基督の親らも、般々奇蹟を行ひ、其弟子も、同く之を
 行ひ、去先、以て、非常なる困難の中、宗教を起さる、其宗教は
 る、亦、非常、不、私、ま、行、了、に、世界の状態を變へ、遂に無雙に
 結果を生じ、世に、此を、全くと、基督は復活の、一照し、係はる者なり

何ぞ詐術に由ること、せんや、儻々復活の一點ありせば
 右示せざる如く、基督を偽人おきて、其信者は欺りたるを
 ん、基督の神性を証せん為に命を棄たる者數百万人も亦
 偽人あらん、然るばば歐米の文明の基礎たる基督の偽あり
 而も、歐米各國は其紀元の始を偽人の誕生日を以てきた
 るならん、是寧ろ基督の復活よりも信じがたき事となさ
 や、否、基督の復活ありせば、右に盛大を言ぬべし、もあらず
 連も基督教と世に存し得ざるべし、ものあり、然らば基督の復
 活と決まると疑ふ可からざる眞實の事なり、其眞實あるに由
 ると、其聖教も眞實あり、其聖教の眞實あるや、自ら宣ひ去若
 く、正しく神の子基督あり、救主あり、若し然らずんば、神と決
 まると之を復活らせ給ふべし、其聖約に従はず、既に自ら

復活を給はば、之を尊信する者の救となるべし、眞實あり、之
 を尊信せざる者の全滅に取らるべし、亦眞實ある矣哉

明治廿三年九月廿七日印刷
明治廿三年十月十七日出版

發行者

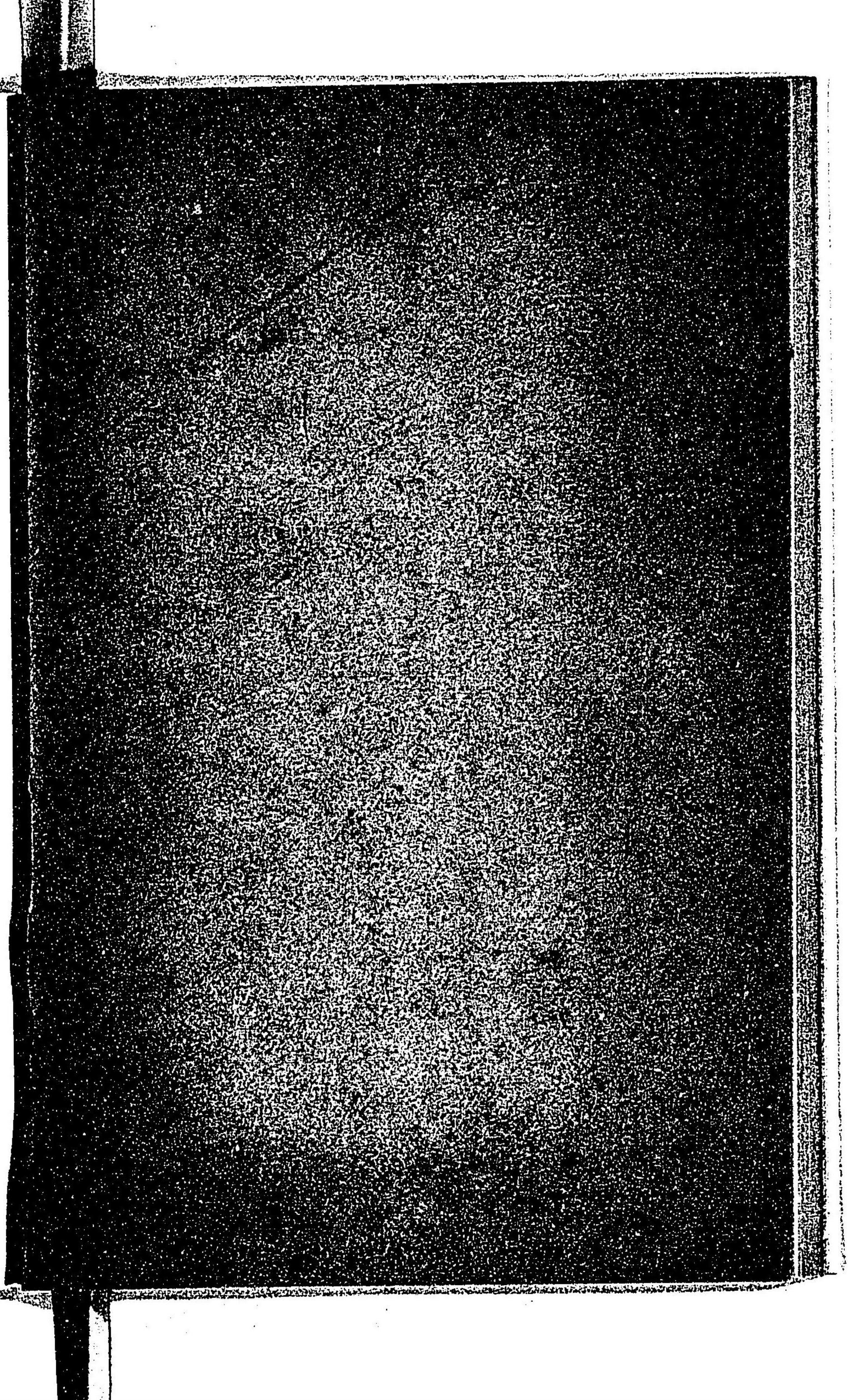
福岡縣福岡市福岡
因幡町三十一番地
小川 末太郎

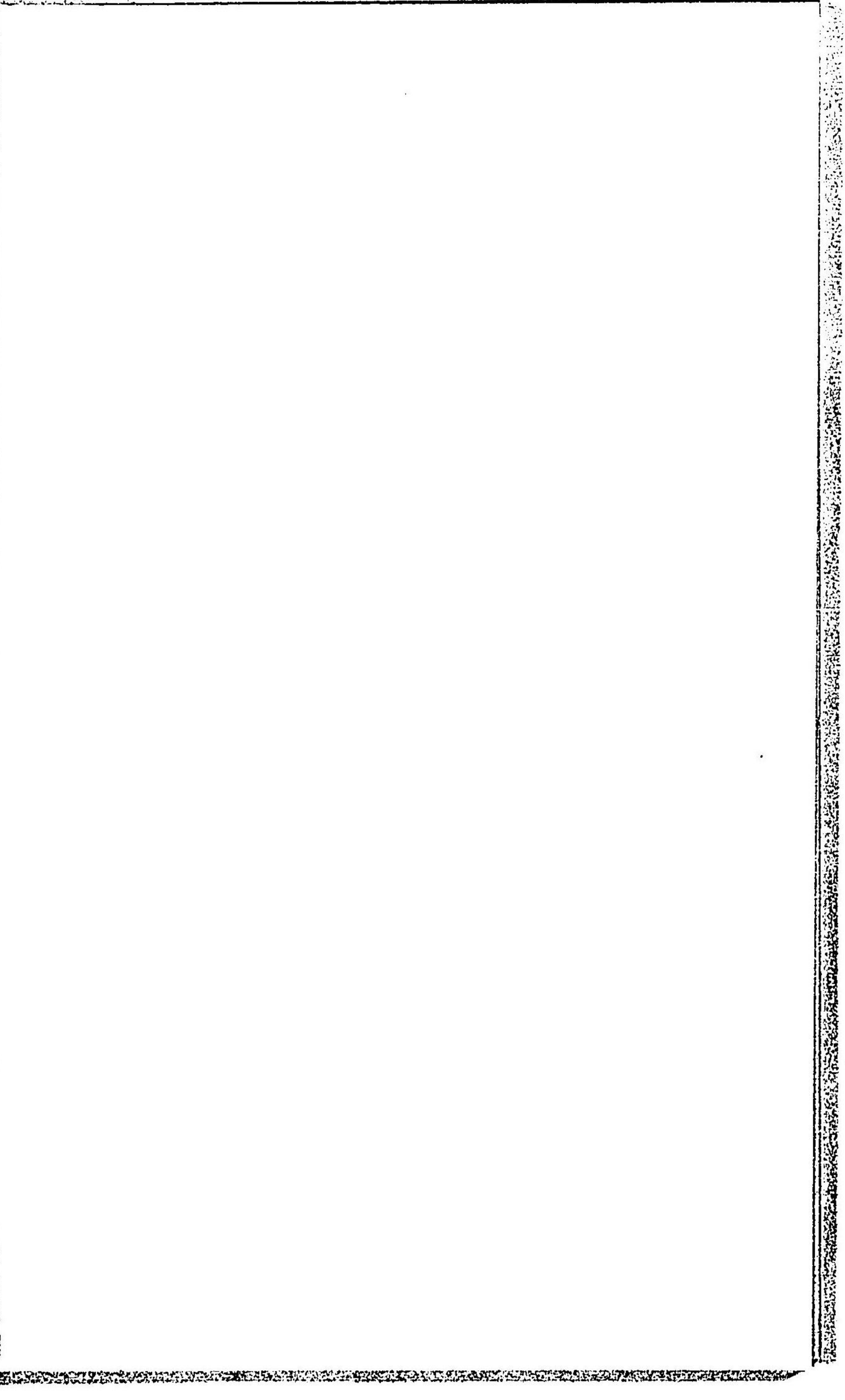
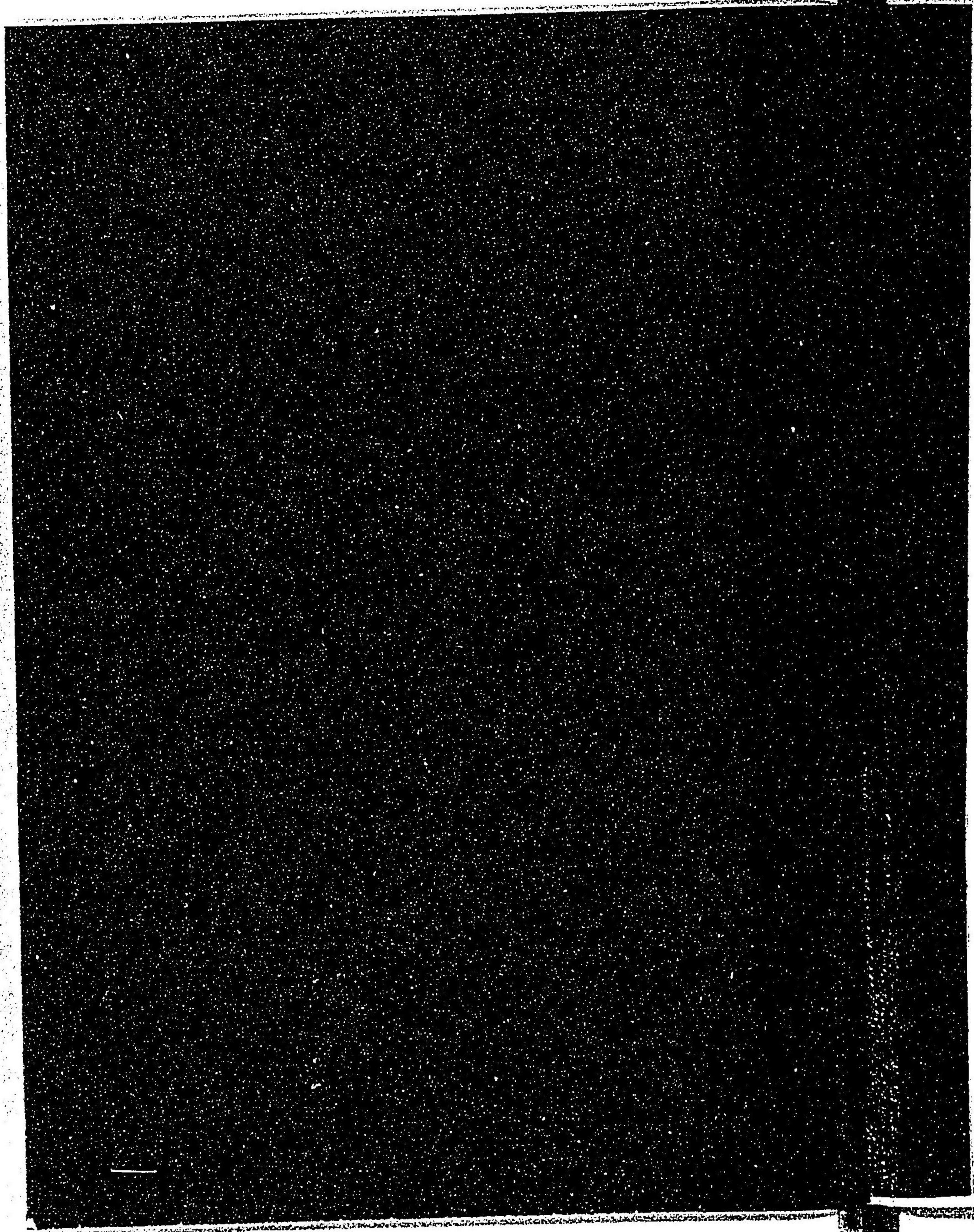
印刷者

東 昇
福岡縣福岡市福岡
西小姓町十六番地

發行所

福岡
公會
教會





9
1

基督之復活

ラゲ

1 国立国会図書館

020585-000-1

特49-811

基督の復活，歴史之論点に拠りて証す

ラゲ/著

M23

ABI-0400



特

8

